

# 日本スポーツ社会学会会報

Vol. 37

## *Sport Sociology*

### 【目次】

・日本スポーツ社会学会第13回大会プログラム・大会情報	... 1
・海外研究通信 在外研究雑感 - エジンバラ大学での一年 -	... 7
・図書紹介 『南海ホークスがあったころ』の出版に寄せて	... 10
・海外学会報告 2003 北米スポーツ社会学会 (NASSS)	... 12
・国際交流委員会だより	... 15
・研究委員会報告 (研究プロジェクトについて)	... 16
・研究会情報 第3回日本スポーツとジェンダー研究会 (JSSGS)	... 18
・編集委員会からのお知らせ	... 19
・事務局からのお願い	... 19
・編集後記 / 事務局住所 / 入会申込書	... 20

日本スポーツ社会学会  
Japan Society of Sport Sociology  
事務局 京都教育大学 2004年3月

## 第13回日本スポーツ社会学会旭川大会プログラム

2004年3月26日(金)

11:00 12:00 理事会 N122 教室(1F)

12:00 受付

13:00 一般発表

- A N370 教室(3F) 司会 高畑 幸(大阪市立大学)  
グローバル政治・経済とアジアのスポーツ産業 ナイキの戦略を中心に  
深澤 宏(秋田大学)  
遊び時間と社会変容 日本とタイの比較調査から 安部 陽子(岡山大学大学院)

- B N170 教室(1F) 司会 杉本 厚夫(京都教育大学)  
スポーツ観に関する研究 ~日本・中国・韓国体育専攻学生の勝利志向比較から~  
依田 充代(日本体育大学女子短期大学)  
スポーツマンシップ、フェアプレイ、フェアプレイ精神に関する研究  
島田 佳奈(日本体育大学)

- C N171 教室(1F) 司会 海老原 修(横浜国立大学)  
スポーツ選手のセカンドキャリアに関する研究 ソフトボール選手の場合  
山本 恵弥里(東海大学大学院)  
スポーツ・トランスファーの個人史にみる困難の両義性  
元アメリカ杯日本代表クルーを事例として 吉田 毅(東北工業大学)

14:10 15:10 特別講演 N370 教室

講師 Andrew Brookes(ラトロープ大学ベンディゴ校、豪)

講演題目 “Outdoor Activity in the Context of Nature and Society”

「自然と社会というコンテキストからみるアウトドア・アクティビティ」

Andrew Brookes氏は、オーストラリアのラトロープ大学ベンディゴ校地域開発学部芸術教育学科野外教育及びネイチャーツーリズム・コースのSenior Lecturerです。野外教育及びネイチャーツーリズム・コースでは、実践的教育と共に、自然についての知識の発達、土地との関係構築、場所、文化、言語、経験の理解に関する研究教育を行っています。その中で、氏は、野外教育やアウトドア・アクティビティの文化的側面に着目し、社会学や文化人類学との知的交流を積極的に進めてきました。その研究の一面を紹介すると、従来の野外教育やアウトドア・アクティビティにおける普遍主義的言説とその言説に導かれた経験が、社会と自然の関係性に関する理解や自然そのものの理解を歪めていることを明らかにし、場所における経験を重視すべきだと主張しています。今回の特別講演は、スポーツ社会学会において「環境」というテーマといかに取り組んでいくのか、そのひとつの方向性を示唆してくれるものになることでしょう。

15:20 - 17:20 **公開シンポジウム** N370 教室

**テーマ： 新たな観光開発と地域社会 北海道におけるアウトドア体験観光をみすえて**

**コーディネーター** 前田 和司（北海道教育大学旭川校）

**パネリスト** 足立 重和（愛知教育大学）

盆踊りと価値形成的な地域づくり

岐阜県八幡町の郡上おどりの事例から

進士 徹（NPO 法人あぶくまエヌエスネット代表）

自然学校と地域連携の実践

アウトドア体験観光は北海道のみならず日本各地で展開しています。とりわけ北海道は、道の基幹産業として観光を位置づけ、特にアウトドア体験観光によって各地域の環境保全と地域活性化を同時に進めていこうとしています。こうしたアウトドア体験観光は、従来のマス・ツーリズムと比較すると対象地の環境や地域社会の文化・経済へのネガティブなインパクトが少なく、逆に地域の自然を活用するものとして期待されています。しかし、アウトドア・アクティビティと対象地域の伝統や生活との文化的差異が、地域住民のアウトドア体験観光への関与を阻害するといった問題も出てきています。一方で、これまで観光開発の対象とならなかったような町村や小さな集落の伝統文化、生活文化などが、都市の人たちの自然志向や本物志向、田舎暮らしへのあこがれが高まることで、少しずつ観光資源として見直されてきています。そのときに、都市や観光業界のニーズを一方向的に押しつけられるのではなく、また文化の真正性に規定されて住民の創造性を失わせるのでもなく、伝統文化や生活文化をうまく流用しながら、地域社会の自立と自律をはかり、その上で都市との対等な関係、あるいは共同関係をいかにつくりだしていくかを考える必要性がでてきます。本シンポジウムでは、こうした問題関心に基づいて、お二人のパネリストに報告していただき、議論を深めて生きたいと考えています。

17:30 - 18:30 **総会** N370 教室

18:30 - **懇親会** 福利厚生施設食堂

2004年3月27日(土)

9:00 - 10:30 一般発表

- A N370 教室 司会 森川 貞夫(日本体育大学)

組織文化論からみた地域スポーツクラブのシンボルの意味共有

神戸レガッタ&アスレティッククラブのケーススタディ 伊藤 克広(神戸大学大学院)

総合型地域スポーツクラブと地域活性化に関する研究 田島 良輝(早稲田大学)

総合型地域スポーツクラブ育成のプロセス評価 理念と現実 山口 泰雄(神戸大学)

- B N170 教室 司会 長屋 昭義(兵庫県立看護大学)

地域婦人会とスポーツ ~群馬県桐生市の婦人会のスポーツ活動に関する一考察~

後藤 貴浩(群馬大学)

スポーツ少年団の地域的展開に関する事例研究

中島 信博(東北大学)

地域スポーツ集団の形成に関する研究 「総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業」

指定終了市町村への調査から

伊藤 恵造(日本体育大学)

- C N171 教室 司会 松田 恵示(岡山大学)

感覚の人称性と上達 武道を事例として

倉島 哲(京都大学)

プロレスの現象学

小林 正幸(法政大学大学院)

スポーツ学が意味するもの スポーツ科学からのパラダイムシフトの必要性

海老島 均(びわこ成蹊スポーツ大学)

10:40 - 12:10 一般発表

- A N370 教室 司会 挾本 佳代(成蹊大学)

女子学生による“スポーツの場”におけるセクシャル・ハラスメント認識の特徴

“スポーツ以外の場”との比較を通じて

高峰 修(中京大学体育研究所)

スポーツにおけるセクシュアル・ハラスメント研究の視点と課題

海外の研究成果から

熊安 貴美江(大阪女子大学)

大相撲九州場所観戦者の調査 大相撲におけるジェンダーの研究 生沼 芳弘(東海大学)

- B N170 教室 司会 大沼 義彦(北海道大学)

「ここでやった大会」/「みんなのチーム」とは何か

鹿嶋市S地区におけるW杯と鹿島アントラーズ

橋本 政晴(日本女子大学)

「地域への貢献」という神話

地元旅館業者からみたワールドカップと鹿島

石岡 文昇(筑波大学大学院)

2002FIFAワールドカップと在日コリアン

鈴木 文明(市立名寄短期大学)

- C N171 教室 司会 山本 教人 (九州大学)

**スポーツ研究における公共性論の批判的検討**

**浦和レッズサポーターの事例から**

吉田 幸司 (筑波大学大学院)

**故郷の再生：近畿カーブ後援会と近畿広島県人会を対象に**

**(私設応援団のフィールドワーク3)**

高橋 豪仁 (奈良教育大学)

**「障害者スポーツ」というカテゴリーの組替えに関する研究**

**車椅子バスケットボールチームの実践から**

渡 正 (筑波大学大学院)

12:10 - 13:10 休憩

13:10 - 14:10 一般発表

- A N170 教室 司会 佐川 哲也 (金沢大学)

**日本スポーツ仲裁機構設立の意味**

小野寺 直樹 (横浜国立大学)

**主体的実践としての苦痛と怪我**

**ボクシングジムへの入会プロセスを事例として**

池本 淳一 (大阪大学大学院)

13:10 - 16:00 課題研究 A N370 教室

**コーディネーター リー・トンプソン (早稲田大学)**

**テーマ：ドキュメンタリー映画 (アメリカPBS制作「Rocks With Wings」) を観る**

映画を鑑賞した後、ディスカッションを行います。そこでは、コメンテーターを設定せず、参加者に自由な意見と感想を述べてもらいます。描かれた内容について、あるいは作品としてのコメント、また、監督の意図や策略、映画で提示されたものと違う捉え方など、観点は多様にあるでしょう。学会のシンポジウムやテーマセッションは、フロアを引き入れたディスカッションが欲求不満に終わることは多々あるように思います。今回は、映画のあとの数十分間を参加者に解放したいと思っています。積極的な発言を期待しています。

“Rock with Wings” について

アメリカ公共放送PBSで2002年12月に放映されたドキュメンタリー映画。Rick Derby制作・監督。

舞台は、ニューメキシコ州シップロックという町。シップロックは先住民ナバホの居留地であり、全人口の97%はナバホである。失業率50%、貧困率50%など、人々は希望を失い人生をあきらめている。そのシップロックの高校に大学新卒の教員がやってくる。町で唯一の黒人であるこの新米教師は、女子バスケットボール部の監督につく。町の元気のなさを反映して、このチームも低迷している。しかし、「私は今まで負けたことはない」という新米監督は、厳しい練習で選手の力を引き出し、ついに州大会にまで出場させる。ところが、チームの成長の裏には様々な問題が山積みだった。それが州大会で爆発する。ドキュメンタリーの中では、実際のシップロックが紹介され、登場人物のコーチや選手のインタビューがあり、チームの活動は地域を背景にそれぞれの関係者の過去と現在のなかに位置づけられる。そして、ナバホの文化や芸術の背景にある哲学、宇宙観が映画全体に一つの意味付けを与える。このドキュメンタリーは、マクロ・レベルではアメリカ社会における人種問題、中間のレベルでは学校と地域社会との関係、ミクロ・レベルではチーム内の様々な人間関係など、スポーツを通して様々な社会の姿を描き出している。

14:20 - 16:20 課題研究B N171教室

コーディネーター 松田 恵示(岡山大学)

テーマ: スポーツとことば (1) -言説化するスポーツ/言説からはみ出すスポーツ-

司会 黄 順姫(筑波大学 スポーツ社会学)

報告者

David Lehney (ウィスコンシン大学 政治学)

毛利 嘉孝 (九州大学 カルチュラルスタディーズ)

松田 恵示 (岡山大学 スポーツ社会学)

討論者

John Horne (エジンバラ大学 スポーツ社会学)

杉本 厚夫 (京都教育大学 スポーツ社会学)

課題研究「スポーツとことば」の第一回目は、スポーツと言説(discourse)の關係に焦点をあててみます。言説とは、文字どおり「語り方」のことです。

言語が他者に属するものであり、また言語を媒介することによってのみスポーツの行為者である主体もまた成立するのであれば、社会的現実としてのスポーツは、正確には言語によって「語られた現実」でもあります。あるいは、言説実践の効果である、といった見方もできます。こうした社会構築主義的な見方からすれば、スポーツ社会学にたずさわる言説生産の専門家のみならず、日常生活を営む生活者が、スポーツにどのような「語り」を与え社会的現実としてスポーツを構築しているのか、という関心がまず生まれてきます。

ところが、こうした「語り」は、他者にたいして向けられ、また他者の「語り」とも響応し流通するものである以上、任意に自由にそして好き勝手に語ることが許されません。しかるべきTPOに応じて、しかるべき意味内容と形態をとり、他者からしかるべき「語り」として承認されたものであることを求められます。

こうしたスポーツの「語り」が、より広い公共的な空間においてなされるときは、社会的承認を保持するためのレトリックとしても使われます。つまりここには、「語り」がある特定の人々や集団のどのような「利害」によって拘束されているのか、さらにはこうした「語り」が持つ政治的效果は何か、という問題を設定することができることとなります。

一方で、こうしたスポーツの「語り」が、生きられ経験される人々の日常生活の中で見いだされるとき、ここにはさりげない日々のスポーツという文化の実践の中に潜む、差異とアイデンティティの構成過程が浮かび上がってくることにもなります。つまり、スポーツの「語り」が生産される日常的な「場」の有り様を明らかにする、といった問題です。

けれども、そもそもスポーツは「語られる」ものなのか。スポーツが社会的現実の1つであることは疑いにくいけれども、個別で具体的に広がる「スポーツ」という出来事は「語り」の中にすべて回収できうる現実なのか、という疑問が残ります。これはスポーツと言説の關係を考える際に、もっともラディカルな問いであるかと思えます。また、この問いの延長線上に、スポーツ社会学の面白さが潜んでいるかもしれません。

以上のような問題関心を、下記のような報告者とコメンテーターからそれぞれの立場で提示してもらった上で、フロアのみなさんと議論を行ないたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

## 【学会大会事務局からのお知らせ】

### 1. 参加申し込みについて

参加申し込みは当日でも受け付けますが、できるだけお早めにお申し込みください。特にエクスカージョンに参加希望の方は、人数を把握する必要がありますので、3月10日頃までにお申し込みください。参加申し込みは、大会ホームページ (<http://www.jsss.org/>) から行うことができます。尚、お申し込みと同時に、参加費を郵便振替にてお支払いください。

参加費 6,000円 (学生会員 3,000円)

懇親会費 4,000円

エクスカージョン参加費 2,000円

口座記号番号：02760-1-40536 加入者名：前田和司

### 《学会についての問い合わせ先》

日本スポーツ社会学会旭川大会実行委員会

北海道教育大学旭川校スポーツ社会学研究室 前田和司

Tel 0166-59-1342 Fax 0166-59-1209 e-mail maeda@asa.hokkyodai.ac.jp

### 2. 天候について

3月下旬の旭川の気温は、最低気温 - 5度前後、最高気温 + 5度前後です。残雪もあり、夜間には道路が凍結します。ソールに凹凸のない革靴は滑って転倒する可能性があります。

### 3. 航空チケット・宿泊について

実行委員会では航空チケット、宿泊の斡旋を致しません。旅行代理店のホテルつき航空チケット等をご利用ください。全国主要都市からのホテルつき航空チケットの価格を調べてみましたが、東京発旭川往復2泊3日 34800円～、名古屋発旭川往復2泊3日 36800円～、大阪発旭川往復2泊3日 40800円～といったバックがあるようです。

### 4. エクスカージョン「原生林歩くスキー・ツアー」について

エクスカージョンでは、「丘のまち」として有名な美瑛町の、十勝岳の裾野に広がる原生林でのスキー・ツアーです。エゾシカの群れが残した足跡や、クマゲラのドラミングなど、澄み切った空気の中、自然が見せてくれる様々な表情を味わいながら、約1時間半、原生林の中を歩くスキーで散策します。歩くスキーの道具(スキー板、ストック、スキー靴)は無料レンタルいたします。ご希望の方は、申し込み時に身長と足のサイズをお知らせ下さい。

- (1)日程 3月28日(日) 09:00 北海道教育大学旭川校集合  
09:30 北海道教育大学旭川校出発  
10:30 美瑛町白金模範牧場到着  
11:00 原生林歩くスキー・ツアー(昼食つき)  
12:30 ツアー終了。温泉入浴(別料金)  
14:00 白金温泉出発  
14:40 旭川空港着  
15:30 JR旭川駅着

- (2)服装について: 3月末の旭川周辺の気温は、天候にもよりますが、最高気温5、最低気温 - 5 前後です。ただし、歩くスキー・ツアー時は結構汗をかきますので、服装は化繊の下着上下(スキータイツ等)、ジャージ上下、フリースのトレーナーかジャケット、ウィンドブレーカー上下に暖かい帽子とスキー手袋で十分でしょう。もちろんスキーウェアでも構いません。それに休憩時の保温のために、暖かいジャケット等をディパックに入れて持参すると良いでしょう。

- (3)参加費 2,000円(バス代、昼食代)

## 在外研究雑感 - エジンバラ大学での一年 -

高橋義雄(名古屋大学)

私は、現在、文部科学省在外研究員としてスコットランドのエジンバラ大学教育学部に滞在し、ジョン・ホーン博士と共同研究を手がけています。本稿では、英国での在外研究で実感したことを皆様にご報告できればと思います。

ご存知のように、ラグビーW杯はイングランドが優勝しました。独立国であったスコットランドは1707年にイングランドに併合され、1999年になってやっと独自の議会がスタートした歴史があるため、いつもは敵対意識を持つスコットランドでも、イングランドが勝ち進むにつれ、ラグビーの話題が大きく取り上げられるようになりました。熱狂してファンに迎えられる選手たちの報道は、BBCのメインの放送が全国版のためにスコットランドでも放映されました。周囲の人からイングランドのナショナル・アイデンティティやUKレベルでのマルチナショナルな感情に触れることができました。

11月26日の午前中には、BBCで議会の公式開会式(State Opening)が中継されました。エリザベス二世がバッキンガム宮殿から、国会議事堂(ピック・ベン)に馬車で現れ、王冠は別にロンドン塔から議事堂に運び込まれます。儀式の服を着た女王一行は、各国の大使などが参列する廊下を通り、上院(貴族の議会:House of Lords)の議場に到着します。上院議員は赤いガウンを纏って女王を迎えます。次に、女王の使者が、下院(庶民の議会:House of Commons)の議場へ、女王のお言葉を拝聴するよう呼びつけに行くが、下院は門を閉ざして使者を迎え入れません。使者はやむなくドアを手にかけていた杓のようなものでガンガンと叩き、ようやく下院側の人間が格子窓から使者を確認して、下院へ使者を迎え入れます。使者の言葉を聞いた下院議員は、「何やら女王が呼んでいるぞ」という態度で厳粛さの微塵もなく、首相を先頭に二大政党の議員たちが、同時にガヤガヤと談笑しながら女王の待つ上院へと歩いていきます。下院議員は、上院の議場には席がなく、ブレア首相も入口付近で立ったまま、女王の開会宣言を傍聴することになります。王冠を纏った女王は、下院の首相の責任で書かれた「わが政府」が今回期中に提出する法案(Bill)を読み上げます。女王が下院の首相の責任で書かれた文書を変更して読むことはないよう、首相がそれを監視しているというドラマが繰り広げられます。この議会開会の儀式は、英国の権力が王(King)、貴族(Lords)、そして庶民(Commons)へと移動し、庶民代表である下院(庶民 commons)が統治権力を制御していることを象徴していますが、「公共性」がダイナミックに変化してきたことを実感することができます。

エジンバラに住んでみると、自ら働く必要のない貴族(領主)や財産を作った商人が楽しんだレジャーと、日々の労働でやっと生活することができた庶民のレジャーという社会階級のリアリティも感じることができます。例えば、ゴルフは、自由になる土地がなければならないし、競馬やハンティングは馬や犬の維持はもとより、乗馬や狩りのできる土地が必要です。今でこそ、行政の介入で、庶民も利用料さえ払えばプレイすることができるパブリックコースがありますが、クラブの会



員になるためには、財産や性別などのハードルが現在も残っています。一方、Tony Collins & Wray Vamplew<sup>注1</sup>にあるように、Pub(Public house:居酒屋、Inn(旅籠)も経営)は、財産のない庶民(当時は男性が中心ですが)にも開かれ、パブの主人が主催するスキットル、輪投げ、ボウリング、ボクシング、レスリング、テニス、徒競走、クリケット、鳩・すずめ撃ち、闘鶏など賞金付きの試合や賭けを庶民も楽しんでいました。パブは庶民が遊ぶための財を提供する社会的空間でもあり、現在もスキットル、ダーツ、スヌーカーを用意したパブがあります。

英国は、政府による平等な再配分をめざす社会福祉指向の労働党(現政権)と、自由市場を指向する保守党の二大政党制ですが、日本と英国のスポーツ政策の比較研究は日本のスポーツ政策の現状や問題点を示してくれるのではないだろうか。英国は「ゆりかごから墓場まで」で有名ですが、1960年代から積極的に政府がスポーツに関与してきました。しかし財政赤字で1979年に保守党のサッチャーが政権につくと、国営企業の民営化、既得権の打破、金融制度の大幅自由化を断行、スポーツ行政の縮小と民営化が進みました。保守党政権が導入したCCT(強制競争入札:Compulsory Competitive Tendering)によって公立スポーツ施設の経営ですら、企業やNPOと行政が入札で競うようになりました。

この変革期の混乱でスポーツはダメージを受け、1990年に発足する保守党のメジャー政権はスポーツ振興を図ります。1993年に新たなスポーツの財源として「全国宝くじ」を導入しました。現在の労働党のブレア政権は1997年に登場、一転して地方分権を推進し、効率一辺倒であった行政サービスを質的な評価を行う「ベスト・バリュー」(スーパーの安売りちらしの「お買い得!」のようです)を導入し、経済効率と社会的公正を同時に追求しています。スポーツ施設の経営は、「ベスト・バリュー」で評価されるようになり、市民の満足を最大限に尊重する質の高い効率的な経営、ガバナンスが求められています。ちなみにブレア首相の「お気に入りの知識人」は、社会学者のギデンズであり、その著『第三の道』がブレア政権の政策研究において参考になります。

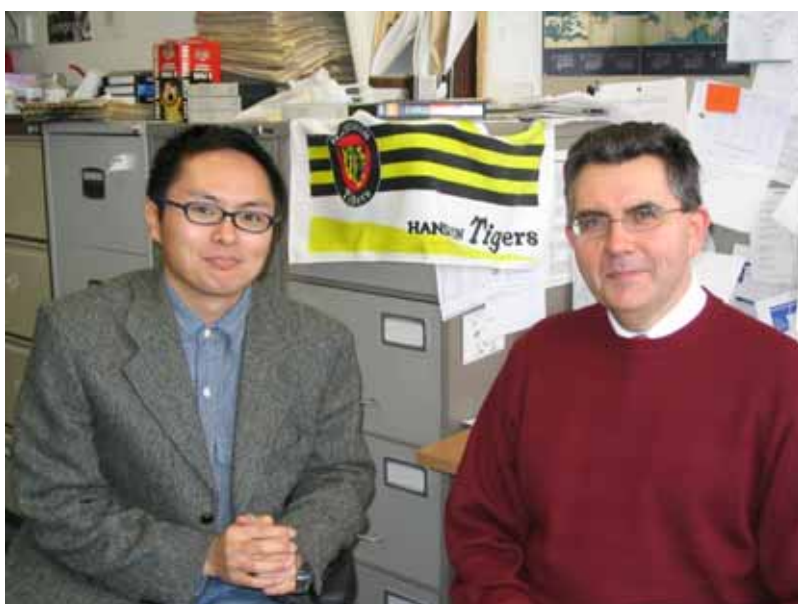
こちらでは、英国のスポーツ施設を見学し、関係者にヒアリングをしています。スポーツ施設をガバナンスの視点で見ると、学校のスポーツ施設を含め4分類できます。まず会員の合意形成システムに則って自発的(voluntary)に経営されるプライベートな会員制クラブがあります。これらのボランタリーなプライベートクラブは、歴史的に社会階層や性別などの入会制限がある場合もありますが、現在では会員の減少や経営的な問題でパブリック(メンバー以外の大衆)に施設利用を開放するクラブもあります。次に株式を発行し、市場から資金を調達して市場メカニズムに則って経営される会員制のプライベートなクラブがあります。ちなみにイングランドプレミアリーグのサッカークラブは、株式上場し、市場から資金調達しているクラブがあります。第3に、行政が社会福祉としての供給する意味合いのある公立スポーツ施設があります。保守党が導入した強制競争入札制度は、労働党政権が廃止しましたが、現在でもエジンバラ市ではNPO組織のエジンバラ・レジャーが公立スポーツ施設の経営を受託しています。この組織のスタッフはもともとエジンバラ市役所の公務員でしたが、NPO組織として外部組織となり、現在は公務員ではありません。最後に学校施設ですが、こちらのユージン・コネリー先生の推薦で地域社会の生涯学習と学校教育が共同して同じ校舎を利用するDual Useのハイスクールを見学しました。学校教育とは全く

別のスタッフが生涯学習サービスをハイスクール内で提供しており、地域コミュニティの学校施設利用で見習うものがありました。セキュリティについても質問しましたが、市民の入口は別に設けられ、すべての入場者は入口で記名してバッチをもらうという厳重なものでした。

階級社会であった英国で、スポーツが徐々に階級的な壁を破り、庶民へ普及・拡大した一因には、徹底的な自由主義の潮流が、権威主義的、階級的な支配構造を解体し、誰もが平等にアクセス・選択できる機会をつくったことがあげられます。しかし、「市場の失敗」の結果、構築される新たな構造は、スポーツ難民を改めて生み出します。そのため人々のスポーツ活動を保障するシステムとして、「政府の介入」による社会福祉としての「包含」(inclusion)を目指すスポーツ政策が考えられるようになります。英国の事例を見ると、二大政党制であるがゆえに、政策の方向性が明確になり、不利になった人の「痛み」が顕在化するからこそ、社会問題の構造が問題化するのではないのでしょうか。「痛み」(権威の権力が暴かれる「痛み」と自由主義によって構築される構造からはじかれる「痛み」)を恐れた中途半端な改革は、既存の権威主義的、階級的な構造が隠蔽するとも考えられそうです。

最後に、こちらでは、ジョン・ホーン博士の授業 (Sport in a Global Context) も聴講することができました。エジンバラ大学の学生のデータ収集能力やディベート力、またまじめさや日本にはもう見られないような規範意識に驚かされました。博士との共同研究では社会の「国際化」「情報化」「市場化」によって生じるスポーツ労働者の国際的な移民について分析を行いました。彼の理論と英語のアドバイスと、小生の彼への日本語サポートで結実した研究成果は、ウーン大学の Wolfram Manzenreiter 氏と共同編集する書籍として来年 ROUTLEDGE 社から出版される予定です。

注) Tony Collins & Wray Vamplew (2002), *Mud, Sweat And Beers A Cultural History of Sport and Alcohol*, BERG.



写真はジョン・ホーン博士の研究室で

## 【図書紹介】

### 『南海ホークスがあったころ』の出版に寄せて

永井良和（関西大学社会学部）

2003年のプロ野球ペナントレースをふりかえるとき、阪神タイガースの活躍はひときわ目立つ現象として思い起こされよう。関西の放送局や新聞社にかぎらず多くのマスメディアがタイガース情報を流し、関連書籍の出版は異例ともいえる点数にのぼった。そのようななかで、『南海ホークスがあったころ 野球ファンとパ・リーグの文化史』を紀伊國屋書店から上梓した。南海球団が消滅して15年が過ぎているうえ、地味なパ・リーグをテーマにした本である。「時流に乗らない企画」の最たるものであり、出版を決断してくれた版元の勇気と度量に感謝している。

だが、反響は予想以上に大きかった。増刷を重ね7刷を超えたのだが、これには、正直いって驚いた。発売から半年以上が経った現在でも、書店で買っていく方がいると聞く。「浪花のホークス」に対する思いを抱いたまま生きている人たちが、その数字を支えているのだと感じた。

プロ野球の世界を描いたこれまでの本は、その多くがスター選手や名監督の回顧録か、彼らの名前を冠した技術解説書か、スポーツライターのエッセイであった。読みごたえのある名著もあるが、しかし、野球の歴史を一定の観点からふりかえる作業が意識的になされているわけではない。歴史については、各球団の球団史や親会社の社史が残されているけれども、球場に通い、声援を送っていたファンについて十分な記載があるものはほとんどない。「ファンが主役だ」とは、よく語られる言葉だが、しかし、実態は脇役としてさへ満足に扱われていないのである。

そういった状況に一石を投じるつもりで、本を書いてみた。多くの人が手にしてくれたということ、また好意的に迎えてくれたことは、著者の狙いがあるていど当たった証左と自賛したい。現在のスポーツ・ジャーナリズムの抱えている問題、たとえばセ・リーグの特定球団への依存度の高さや、ファンを軽視する姿勢などに対して、不満が潜在しているのだと思う。

しかしながら、研究書としてこの本の仕上がりを反省するとき、課題は少なくない。なかでも大きいのは、応援という行動について総体的な記述・分析をすることができなかった点である。南海ホークスという特定のチームの応援に関連することからについては、その発生や変遷の経緯を大まかながらも何とか把握することができた。これは、球場で応援をする人びとたちからの聞き取りや、古い雑誌など記録の閲覧ができたことによる。それでも、事情をよく知る人の多くは鬼籍に入り、また貴重な資料が散逸していた。もっと早い時期に、応援行動が研究対象として設定され、記録・分析がなされていれば、再構成できたはずの事実が失われていた。悔いたところでしかたないかもしれないが、残された記録をできるだけ発掘し、できうるかぎりの事実を再構成する努力は今後も必要だと思う。

とりわけ、プロ野球人気が高まる時代にさきがける、「前史」としての学生野球や社会人

野球の応援行動については、さらなる基礎研究が求められる。太鼓をはじめとする鳴り物、拍手、そして旗などの要素からなる「応援行動」は、時代とともに少しずつ変化しているが、およそ百年の伝統がある。そして、その基本的なかたちは、野球にかぎらず、「見せる競技スポーツ」に付随する現象として、長い歴史をもった集合行動だといえる。ある種目の応援が別の種目の応援に影響を与え、学生の行動が一般ファンの行動を変化させる。そういったことの繰り返しが、いまのスポーツの応援行動を生み出してきた。

これら相互の関係を詳細に点検することが、求められる。古い時代については、学生野球などの応援について明らかにしている文献がある。しかし、野球なら野球というひとつの競技を素材として分析するにとどまり、相撲や、漕艇や、あるいはラグビーの応援とどういう相互関連にあったのか、十分に詳らかになっていない。

また現代の状況に関していえば、海外のスポーツファンの応援のありようが、日本のスポーツ観戦のしかたを左右している事実を軽んじることできないだろう。メジャーリーグの球場のようすや、ヨーロッパのサッカー・スタジアムの観客席を、テレビをつうじて見る機会は増えた。これが、日本の観客席をどのように変えているのか。興味は尽きない。しかしながら、個々の研究者が、それらをすべて確認していく作業を担うことは現実的ではない。共同研究や国際的な協力によって理解は深まるだろうから、これは、学会などの活動にゆだねたい。そのような比較が積み重ねられれば、「メジャーリーグの応援をするファンは だが、日本のプロ野球ファンは××だ」といった、ステレオタイプの文化論から脱却する道が開かれるはずだ。

些事になるが、日本のプロ野球の応援について、調べ残したことを記しておきたい。それは、トランペット応援や個人別応援歌の起源・定着の件だ。よく知られるように、そういった新しい応援の様式は、広島カープのファンが「発明者」だといわれる。今回の本でも、ある程度の資料検索をしたうえで、近年のような形態のトランペット応援をつくりあげたのは1975年の広島ファンだとする説を暫定的に採用した。しかし、戦前にも阪急・阪神戦でプラスバンドが導入されているし、敗戦後の復興期に楽団が球場のスタンドを賑やかにしていたことは記録に残っている。1975年よりも前に、中日の応援団がファンファーレ演奏をしていたというような伝聞もあった。こういった事実関係を、もっときちんと確かめておきたい。そのためには、野球関連の新聞・雑誌記事の詳細な分析が必要だろう。検討すべき資料は、野球雑誌にかぎらず、それぞれの地方紙も含めねばならない。

これは、なかなか骨が折れそうである。けれども、そのようなローカルな事実に対する目配りをしてこそ、読売球団を中心とした野球史を相対化することも可能になる。そして、それは同時に、プロ・スポーツのなかで特権的な地位を占める野球を相対化し、さらには、商業化の著しいアメリカ型スポーツを相対化する視点を確保する道になるのではないか。

話題が広がりすぎた。個々の研究者が達成すべき課題は、特定の都市の特定の球団の応援行動を、まずきちんと記述することだという禁欲的意見もあるだろう。もちろんそのことはふまえたうえで、さまざまなスポーツにかかわる、さまざまなファンの行動を、どのように関連づけ、考える道を開くかということだと思う。

## 【海外学会報告】

### 2003北米スポーツ社会学会 (NASSS)

順天堂大学大学院 高橋 季絵

順天堂大学 野川 春夫

#### はじめに

2003年北米スポーツ社会学会 (North American Society for the Sociology of Sport) が、10月29日から11月1日の3日間にわたり、カナダ・モントリオールのウィングダムホテルにて開催された。今回の学会は「スポーツと人権 (Sports & Human Rights)」をメインテーマとして、スポーツにおける「人種」、「民族」、「ジェンダー」の問題や、「スポーツ政策」、「健康教育」、「身体活動」、「地域政策」、「アイデンティティ」、「生活習慣」、「スポーツとメディア」などをテーマにした発表が行われた。近年、特に話題とされている、「健康づくり」を中心としたセッションも多くみられ、加えて、「スポーツ政策」をテーマとしたセッションが設けられたことは今回の特徴として挙げられる。今回の学会には、北米を中心にヨーロッパやアジアを含め総勢約300名の参加があり、発表者ではアメリカ110名、カナダ100名、その他52名とアメリカ・カナダ以外の国々からの参加者が多いのも印象的であった。しかしながら、アジアからの参加は日本のみであった。また、開催がカナダということで、フランス語でのセッションが独立して行われたことも特徴のひとつであった。

#### セッション発表

学会発表は、3日間でテーマ別に14セッションが開設され、そのうちの4セッションでキーノートアドレスが行われた。

また、テーマ別セッション

主な発表テーマ

ではさまざまな観点から口頭発表がなされた。発表形式は日本の学会と異なり、原稿を読み上げるのではなく手振り・身振りを入れてのレクチャー形式が主流であった。	スポーツと精神文化	スポーツ参加と思春期の健康
	スポーツとメディア	スポーツと教育
	スポーツと人権侵害	スポーツと子ども
	スポーツとセクハラ/ハラスメント	スポーツと公共政策
	ゲイゲーム	スポーツと地域
	スポーツと商業、文化	倫理と民族
	スポーツと社会問題	人種間のアイデンティティと大衆文化
	スポーツと暴力	スポーツと男らしさ
	スポーツと同性愛	レクリエーションと身体活動
	女性スポーツの進化形成	人種とジェンダー
	身体活動と健康習慣	都市型スポーツにみる都市と再創造

現会長のウィブ・レ

ナード (イリノイ州立大学教授) が、第一日目に「スポーツ社会における象徴的な不朽の名声とその後」と題した会長講演を行った。会長講演は、本来総会の前に行われるが、本人のたつての希望 (重荷は早く降ろしたい) で第一日目に設定された。

キーノートアドレスの中で、特に興味深かったものは、ブルース・キッド (トロント大学教授) の「スポーツにおける人権革命の広がり」についての講演である。陸上中距離のカナダ代表選手として東京・メキシコの両オリンピック大会を経験したキッド教授は、メキシコ大会直前のスポーツ人権集會に積極的に参加して以来、性差別や人種差別など広範

困に渡って人権問題に関わっている。今回の講演では、スポーツ界において人権革命がどのような紆余曲折を経てきたのかについて、1968年メキシコ五輪でのハリー・エドワーズの事例を挙げながら紹介するとともに、その後獲得されていった各種の権利を具体的に説明した。また、女性や子供のスポーツにおける権利についての社会背景を明確にしつつ、人々のもつスポーツにおける権利をあげていた。さらに、その後発生した新たな問題であるドーピングや国際オリンピック委員会の贈賄、自由資本主義の限界やその弊害等々、今後も継承されそうな問題につ



ブルース・キッド氏

いても言及した。そして発表の終わりでは、近年新たに生まれ始めた教育や健康分野などでのスポーツを通じた発育活動にも触れるなど、社会におけるスポーツの役割について再考させられる発表であった。

一般発表の中で印象に残ったのは、2000年の夏季五輪開催地であったシドニーを事例としたトロント大学のヘレン・ジェファーソンらによる「オリンピック産業の遺産」、デイビット・ベッカムを題材としたトッププレーヤーにみる海外スポーツビジネス市場への進出とマーケットの確立に関する「スポーツにおける商業と文化」(ウィスコンシン大学：ジェシカ・アスムスら)といえる。北米スポーツ社会学学会においてもサッカーのグローバル化が話題として取り上げられた点も、これまでとは異なるトピックにも目が向けられてきたといえる。だが、サッカーのスーパースターであるベッカムと他のメジャースポーツのスターとの比較ができるのかという質問が挙がり、北米におけるサッカーの認知度が他の4大プロスポーツとは比べて依然極めて低いことを再認識した。

そのほか、「コミュニティとスポーツ」のセッションでは、イギリス・マンチェスター市におけるマンチェスターユナイテッドとマンチェスターシティの2クラブを事例としたクラブとファン・コミュニティの研究があった。2クラブの地元ファンやファングループに焦点をあて、サッカーファンのアイデンティティの構成やファン・コミュニティとチームの関係について調査したうえでサッカーとコミュニティ発展について検討する発表であり、サッカー文化、スポーツと地域振興について後進国である日本人として興味深く、またサッカーの母国と呼ばれるイギリスのサッカーに対する市民の認識の違いを感じることができた。

## 総 会

2日目のセッション終了後には、総会にあたる Business Meeting(総会)が開催され、今年度の NASSS(北米スポーツ社会学会) Awards の表彰が行われた。中でも学会功労賞には、かつてカリフォルニア州立大学(UCLA)、マサチューセッツ大学、ウォータールー大学、イリノイ大学、ウィスコンシン大学で教鞭をとり、スポーツ社会学の基盤を築き上げたジョン・ロイ【写真 右】が選ばれた。博士課程の教え子であるピーター・ドネリー(トロント大学教授)【写真 左】のユーモアあふれるスピーチでロイの業績が紹介され、心温ま



る表彰式であった。

来年度の会長であるエレン・スタロースキー（イサカ大学教授）から新委員の紹介も行われ、次期会長候補としてメアリー・マクドナルド（マイアミ大学教授）が選出されたことも報告された。ここまでは、約150人以上集まった総会も和気藹々とした雰囲気であった。しかし、会長の諮問委員会である「多様化委員会（Diversity committee）」から、アフリカ系及びラテン系アメリカ人に対する今後の対応、いわゆる有色人種への対策、についての意見を求めたいという提案（スプリングフィールド大学：ローレル・デービス）によって会場が騒然となった。これは、昨年度の学会大会で、当時の会長であるアール・スミス（ウェイクフォレスト大学教授）に対する批判から、アフリカ系米人研究者の参加が激減したこと、以前からラテン系米人やメキシコ人研究者の参加が極めて少ないことへの、ある意味における良心的対応ともいえる。結果的には、パンドラの箱を開けた形となり、『スポーツと人権』という大会テーマが未解決のままであることと、人種問題に対応しきれない白人系アメリカ人研究者の苦悩を見せつけられた。

## 終わりに

今学会には、アメリカ、カナダをはじめとして、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、ノルウェーなどの大学教員・学生が参加していたが、アジアからの参加は日本だけであり、奈良女子大学の甲斐、秋田大学の深沢、順天堂大学の野川及び大学院生の櫻井・高橋、研究生の芹沢とノルウェーに留学中の佐藤の7名が参加した。今回は、院生では櫻井のみが発表した。このような学会で海外に留学している日本人の学生とも交流する機会をもつことができ、新たなネットワークづくりや情報収集の場として、多大な収穫のある学会参加となった。

開催地となったモントリオールには、1976年に開催された夏季五輪の際に造られたオリンピック公園が観光地として有名である。オリンピックスタジアムは現在、MLB ナショナルリーグ、モントリオール・エクスポズの本拠地として使われている。ちょうどオフシーズンのため周辺も静寂であったが、45度に傾いた展望台に登ることができる観光ツアーもあり、展望台からはモントリオールの街を一望することができるようになっていた。

筆者にとっては、初めての海外学会参加であったが、服装などもラフで、学会のビジネスミーティングの後に献本（約50冊）が抽選でもらえるラッフル・チケットイベントが催されるなど、日本の学会との違いも知ることができ、また、日本にいただけでは実際に体験することの少ない人種や文化の違いを少しではあるが感じることもできたことは、今後にとって貴重な経験となった。なお、次回は2004年11月3日～7日にアリゾナ州ツーソン市の Marriott University Park Hotel にて開催される。



モントリオールオリンピック跡地

## 国際交流委員会だより

山口泰雄（国際交流委員長）

2004 年は、オリンピック・イヤーです。日本選手の活躍が期待される場所ですが、国際学会や会議も数多く開催されます。国際スポーツ社会学会は、オリンピック開催年ですので、オリンピック・コンGRESSとの共同開催になり、ギリシャで開催されます。この会議では世界のスポーツ社会学者の発表だけでなく、スポーツ科学を構成する下位領域が一堂に集まり、数多くの研究者が集まります。

また、4年に1度開催される第10回 IOC World Sport for All Congress はイタリアのローマで、第8回 World Leisure Congress はオーストラリアのブリスベンで、加齢と身体活動に関する国際学会はカナダのトロントで開催されます。それぞれの国際会議の場所と日程、そしてウェブサイトは、下記のとおりです。

### The 2004 Pre-Olympic Congress

Thessaloniki, Greece 2004年8月6日～11日

<http://www.preolympic2004.com>

### 10<sup>th</sup> World Sport for All Congress 2004.2.24

Rome, Italy 2004年11月11日～14日

[Sportforallcongress2004@coni.it](mailto:Sportforallcongress2004@coni.it)

### 6<sup>th</sup> World Congress on Aging and Physical Activity.

London, Ontario, Canada 2004年8月3日～7日

<http://www.isapa.org/>

### 8<sup>th</sup> World Leisure Congress

Brisbane, Australia 2004年9月12日～17日

<http://parks-leisure.com.au>

### LEDU Congress – International Conference on Leisure, Tourism & Sport

Cologne, Germany 2004年3月18日～20日

<http://www.ledu2004.de/HTML/01Welcome.htm>

### 第5回イチパー・アジア地域大会(5<sup>th</sup> ICHPER-SD Asia Congress 2004)

鹿屋体育大学、2004年12月3日～6日

<http://lifelong.nifs-k.ac.jp/center>

### 12<sup>th</sup> IASI(Int. Ass. of Sport Information) World Congress

Beijin, China 2005年5月19日～21日

<http://iasi.org/>



## 研究委員会からのお知らせ

松田恵示（研究委員長）

今期の課題研究の参加者を公募しましたところ、会員のみなさまからのお申し込みをいただきましてまことにありがとうございました。2年の短い間ではありますが、活発な研究活動を展開できればと思っております。また、学会大会での課題研究セッションに御参加いただき、ご関心を強くお持ちになった会員の方には、引き続きご参加を受け付けておりますので、担当のリー・トンプソン理事か私の方まで、ご連絡いただきますようお願いいたします。

学会大会のプログラムにも掲載されておりますが、今期の課題研究では、「スポーツと表象」というテーマで、2つのプロジェクトを立ち上げました。以下に再掲載いたしますが、どうぞ多くの会員のみなさまに会場で議論に加わっていただくことを楽しみにしております。どうぞよろしく願いいたします。

### 課題研究 A

担当理事 リー・トンプソン（早稲田大学）

#### ドキュメンタリー映画（アメリカ PBS 制作「Rocks With Wings」）を観る

映画を鑑賞した後、ディスカッションを行います。そこでは、コメンテーターを設定せず、参加者に自由な意見と感想を述べてもらいます。描かれた内容について、あるいは作品としてのコメント、また、監督の意図や策略、映画で提示されたものと違う捉え方など、観点は多様にあるでしょう。学会のシンポジウムやテーマセッションは、フロアを引き入れたディスカッションが欲求不満に終わることは多々あるように思います。今回は、映画のあとの数十分間を参加者に解放したいと思っております。積極的な発言を期待しております。

#### “Rock with Wings” について

アメリカ公共放送 PBS で 2002 年 12 月に放映されたドキュメンタリー映画。Rick Derby 制作・監督。舞台は、ニューメキシコ州シップロックという町。シップロックは先住民ナバホの居留地にあり、全人口の 97% はナバホである。失業率 50%、貧困率 50% など、人々は希望を失い人生をあきらめている。そのシップロックの高校に大学新卒の教員がやってくる。町で唯一の黒人であるこの新米教師は、女子バスケットボール部の監督につく。町の元気のなさを反映して、このチームも低迷している。しかし、「私は今まで負けたことはない」という新米監督は、厳しい練習で選手の力を引き出し、ついに州大会にまで出場させる。ところが、チームの成長の裏には様々な問題が山積みだった。それが州大会で爆発する。

ドキュメンタリーの中では、実際のシップロックが紹介され、登場人物のコーチや選手のインタビューがあり、チームの活動は地域を背景にそれぞれの関係者の過去と現在のなかに位置づけられる。そして、ナバホの文化や芸術の背景にある哲学、宇宙観が映画全体に一つの意味付けを与える。このドキュメンタリーは、マクロ・レベルではアメリカ社会における人種問題、中間のレベルでは学校と地域社会との関係、ミクロ・レベルではチーム内の様々な人間関係など、スポーツを通して様々な社会の姿を描き出している。

## スポーツとことば (1) -言説化するスポーツ/言説からはみ出すスポーツ-

課題研究「スポーツとことば」の第一回目は、スポーツと言説(discourse)の関係に焦点をあててみます。言説とは、文字どおり「語り方」のことです。

言語が他者に属するものであり、また言語を媒介することによってのみスポーツの行為者である主体もまた成立するのであれば、社会的現実としてのスポーツは、正確には言語によって「語られた現実」でもあります。あるいは、言説実践の効果である、といった見方もできます。こうした社会構築主義的な見方からすれば、スポーツ社会学にたずさわる言説生産の専門家のみならず、日常生活を営む生活者が、スポーツにどのような「語り」を与え社会的現実としてスポーツを構築しているのか、という関心がまず生まれてきます。

ところが、こうした「語り」は、他者にたいして向けられ、また他者の「語り」とも響応し流通するものである以上、任意に自由にそして好き勝手に語ることが許されません。しかるべき TPO に応じて、しかるべき意味内容と形態をとり、他者からしかるべき「語り」として承認されたものであることを求められます。

こうしたスポーツの「語り」が、より広い公共的な空間においてなされるときは、社会的承認を保持するためのレトリックとしても使われます。つまりここには、「語り」がある特定の人々や集団のどのような「利害」によって拘束されているのか、さらにはこうした「語り」が持つ政治的効果は何か、という問題を設定することができることになります。

一方で、こうしたスポーツの「語り」が、生きられ経験される人々の日常生活の中で見いだされるとき、ここにはさりげない日々のスポーツという文化の実践の中に潜む、差異とアイデンティティの構成過程が浮かび上がってくることにもなります。つまり、スポーツの「語り」が生産される日常的な「場」の有り様を明らかにする、といった問題です。

けれども、そもそもスポーツは「語られる」ものなのか。スポーツが社会的現実の1つであることは疑いにくいけれども、個別で具体的に広がる「スポーツ」という出来事は「語り」の中にすべて回収できうる現実なのか、という疑問が残ります。これはスポーツと言説の関係を考える際に、もっともラディカルな問いであろうと思います。また、この問いの延長線上に、スポーツ社会学の面白さが潜んでいるかもしれません。

以上のような問題関心を、下記のような報告者とコメンテーターからそれぞれの立場で提示してもらった上で、フロアのみなさんと議論を行ないたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

司会	黄順姫	(筑波大学 スポーツ社会学)
報告者	David Lehney	( ウィスコンシンマジソン大学 政治学)
	毛利嘉孝	(九州大学 カルチュラルスタディーズ)
	松田恵示	(岡山大学教育学 スポーツ社会学)
討論者	John Horne	(エジンバラ大学 スポーツ社会学)
	杉本厚夫	(京都教育大学 スポーツ社会学)

# 日本スポーツとジェンダー研究会 (JSSGS) 第3回研究大会のご案内

1. 日時 2004年7月3日(土)～4日(日)
2. 会場 文京学院大学本郷キャンパス  
B館201、202、203号教室、S館コンソナホール  
〒113-8668 東京都文京区向丘1-19-1
3. 交通 営団南北線「東大前」駅下車 徒歩0分(東京駅より約20分)
4. 研究会の内容とスケジュール

7月3日(土)

- 13:00～14:30 講演会「ジェンダーの視点からみたスポーツ解体新書  
男性監督と女性選手の関係を問い直す」  
演者 小倉千加子(心理学者)  
司会 飯田貴子(帝塚山学院大学)
- 15:00～17:00 一般発表  
18:00～20:00 懇親会

7月4日(日)

- 9:00～11:00 シンポジウム「いつまで続くスポーツ界のジェンダーブラインド」  
シンポジスト 掛水通子(東京女子体育大学)  
左近允輝一(朝日新聞社)  
島谷順子(日本女子柔道倶楽部)  
コメンテーター 佐伯年詩雄(筑波大学)  
コーディネーター 萩原美代子(文化女子大学)
- 11:00～12:00 総会  
13:00～15:00 ワークショップA「女子マネージャーをめぐるジェンダー構造」  
発表者 神奈川県教職員組合員  
コーディネーター 井谷恵子(京都教育大学)  
ワークショップB「ダイエット志向とジェンダー」  
発表者 佐古隆之(日本女子大学)  
高峰 修(中京大学体育研究所)  
コーディネーター 阿江美恵子(東京女子体育大学)

5. 参加費 <二日参加> 4,500円(学生2,500円)  
<一日参加> 3,000円(学生2,000円)  
会員は6月1日(火)までの早期申し込みで4,000円。懇親会は別途参加費が必要。

## 6. 参加申し込み

早期申込×切: 6月1日(火)(早期申込料金適用、会員のみ)  
事前申込×切: 6月22日(火) 当日参加も可

## 7. 一般発表申し込み

申込・抄録提出×切: 5月18日(火)(必着)  
発表時間15分、質疑応答5分、計20分(申込数によって変更になる場合があります)

## 8. 問い合わせ先

日本スポーツとジェンダー研究会 第3回研究大会実行委員会 事務局  
〒151-8523 東京都渋谷区代々木3-22-1  
文化女子大学 体育学研究室 担当: 萩原美代子  
Tel & Fax: 03-3375-7577 Email: info@jssgs.org

参加や発表申込など研究大会の詳細につきましては、JSSGSホームページ  
(<http://www.jssgs.org/>)をご覧ください。

情報提供者: 高峰修(中京大学体育研究所)

## 編集委員会からのお知らせ

菊幸一（編集委員長）

編集委員会では、「スポーツ社会学研究」第13巻に掲載する書評の対象書籍について、広く会員の希望を募ることになりました。自薦・他薦は問いませんので、書評として取り上げてほしい書籍がある場合には、以下の編集委員会のメールアドレスまでお寄せください。また、その際、対象書籍にふさわしいと思われる書評者の推薦があるようでしたら、これもお寄せください。ただし、対象書籍の選定及び書評者の決定は、最終的に編集委員会で行いますのでご承知おきください。

【編集委員会のメール：editor@jsss.jp】

## 事務局からのお願い

杉本厚夫（事務局長）

日頃は、学会運営にご協力頂き、誠にありがとうございます。

以下の点で、更なるご協力のほどをよろしくお願い申し上げます。

### <会費納入のお願い>

平成15年度の会費を未納の方、及びそれ以前の会費を未納の方は、至急、下記の口座まで、納入いただきますようお願い申し上げます。

会費未納ですと、学会誌「スポーツ社会学研究」をお送りする事ができませんし、各種のサービスを受けることができません。また、学会運営にも支障をきたしますので、何卒よろしくお願いいたします。

郵便振替口座名：日本スポーツ社会学会

振替口座番号：00390-0-43962

### <メールアドレスの登録のお願い>

学会の情報の電子化に伴い、多くの情報がインターネットで発信されることになりました。さらに、その運営を円滑にかつ迅速に行うために、会員の方に、Eメールで情報をお伝えしております。まだ、メールアドレスをご登録いただいていない方、または変更された方は、事務局までご連絡いただきますようお願い申し上げます。不明な点がございましたら、事務局のメールアドレスまで、お問い合わせください。

【事務局のメール：secretary@jsss.jp】

## 編 集 後 記

学会大会前の会報は、大会プログラムが内容の中心になりがちですが、今号は海外研究通信、図書紹介、海外学会報告、研究会情報等、多くの原稿をお寄せ下さりありがとうございました。次号も宜しく願います。さて、今月末に旭川で開催される第13回大会への参加申し込みはお済みでしょうか。私は、28日(日)のエクスカージョンにも参加する予定です。「滑るスキー」は経験ありますが、「歩くスキー」は初めてです。旭川で、会員の皆様にお会いできますことを楽しみにしています。(H.T.)

### 学会への連絡、入退会、住所・所属・メール等の変更、会費納入、その他の各種手続き

〒612-8522 京都市伏見区深草籐森1 京都教育大学気付  
日本スポーツ社会学会事務局 杉本厚夫【事務局長】  
TEL: 075-644-8283 FAX: 075-645-1734  
E-mail: secretary@jsss.jp  
(郵便口座番号) 00390-0-43962  
(加入者名) 日本スポーツ社会学会事務局

### 会報への投稿

〒630-8528 奈良市高畑町  
奈良教育大学  
高橋豪仁【会報担当】  
E-mail: doc@jsss.jp

### 学会公式ホームページ

日本スポーツ社会学会公式ホームページ  
<http://jsss.jp>

# 入会申し込み書

( 事務局へ送付願います )

ふりがな 氏名：	会員種別(どちらかを で囲む)  正会員 ・ 学生会員
紹介者： (推薦人)  必ず記入して下さい	専門分野：
勤務(所属)先：	
勤務(所属先)住所： 〒	
TEL： FAX：	
自宅住所( 記入は任意です)： 〒	
TEL： FAX：	
郵便物の発送先(どちらかを で囲む)  勤務(所属先)住所 ・ 自宅	
E-mail：  ( _____ @ _____ )  必ず記入して下さい	